

彩の合気

編集発行
埼玉県合気道連盟

埼玉県合気道連盟機関誌NO. 21

日々新たなり

連盟副会長 川路昌治



埼玉県合気道連盟傘下各位の皆様、益々ご健勝にて活躍のことと拝察します。一年半前まで、連盟理事長という大役を拝命し、四苦八苦の中、なんとかその責務を果たすことができました。至らなさを寛容に見て下さったことに、関係各位のご高配を思い起こしております。

光陰矢の如しで、ご協力・ご苦勞いただいた方々に、お礼を申しあげる機会もなく時を過ごしてまいりました。改めて、衷心より御礼申し上げます。

この間、連盟は合気道の普及と各団体の活性化に、大いに存在価値があったと自負しております。これも、偏に地道な活動に邁進する皆様の力によるものと、敬意を表するものであります。

合気道は、技とその発生源たる心、それを体現する人びとの集りであることを実感しました。理事長並びに事務局が浦和合気会に移って、皆様周知の如く益々連盟の活動は生き生きしてまいりました。今後の活躍が大いに期待できます。引き続き、ご協力の程お願い申し上げます。

さて、昨今の世相、マスコミ報道では漸く経済的低迷から抜け出し、戦後間もない「いざなぎ景気」を超える経済の活況を呈している模様です。その実感を伴わない人も多数の

ようではありますが。とにも角にも、日本経済には底力があるのでしょうか。その面では感嘆する次第です。

当面の、国の行く末に胸をなで下ろす一方で、物質的豊かさや「なにほどのものか」という不安が、心をよぎります。連日の眼を被いたくなり、耳を塞ぎたくなるような犯罪の続発。親の子殺し・子の親殺し、手段を選ばない経済犯罪。そうしたことが、新聞・テレビのニュースを賑わしております。これが、現実只今の我が日本の話かと、半信半疑にすらなるのです。

今や、世界各国85カ国に合気道は、支部・道場が存在している。そして、外つ国の人びとは熱心に日本の武道から、何かを掴みとろうとしているのだと聞きます。裏腹に、日本人の心の未熟さが際だってきている。それが、現実ではないでしょうか。武道の役割が増しています。

合気道で、心と体の調和、より深遠なる境地を目指す。その鍛錬に勤しむ我々にとって、なんとも憂うべく現状。心を磨く武道の発信地日本が、信頼を欠く国になってはなりません。

開祖・植芝盛平翁は「すでに麗しき国はできている」、それを汚さないようにするのが合気道の修行と説かれています。調和のとれた人間、さらに次元の高い、縹緲たる宇宙と人間の調和、そのための修行と心得ます。

僭越ながら、「日々新たなり」武道を通して命の触れ合いの中から、ゆっくりと確かに、殺伐とした日本に「喝」を与え続けようではありませんか。

「人の行く裏に道あり、花の山」、おおらかに日本の洗濯を考えましょう。

入間幸武館道場

明 保幸

「県連講習会に参加して」

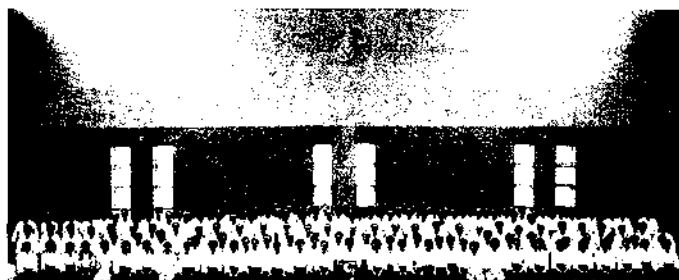
県連講習会は毎年暑くて汗を搾るようなかなり厳しい稽古になる。しかし今年はそんな事より座技での膝の痛みが思い出される。(入間幸武館より畳が硬い) とは言え期待どおり学ぶ事がたくさんあり、考えを定めさせるものもあった。気を見ての素早い入り、中心軸の意識、真直ぐの入り、受身の入り抜け等、いい講習会だった。

入間から越谷は少し遠く、武蔵野線で埼玉を半周するようで、普段特別な用でもない限り行く事はないだろう。入間の茶畑の中の道場も良いが、越谷は立派だ。

いろんな地域に行け、いろんな人にめぐり合え、顔なじみの人もある。稽古では新しい発見があり、後の懇親会では稽古では見えない人となりが見えたりする。それに、各道場の自己紹介というか現況も知ることができ、大変有意義なものを感じる。

講習会は十名で参加した。急用などの事情で参加できなくなった人もいて少し残念だったが、初めて参加した人もいて、新鮮な気持ちもあった。折角の催しなのでもう少し積極的な参加を期待したい。

今年は思い掛けない事が起こった。懇親会も散会の後、途中で偶然に講師の横田師範・伊藤先生と一緒に電車になり方向が同じな事を知り、ご一緒させて頂いた。途中講師先生方との万の会話から合気道に対する情熱を見たような気持だった。お住まいが近いことも幸いに、何か縁のようなものを感じお付き合い頂けた事、思い出に残る嬉しい出来となった。



横田愛明師範の指導の下での記念撮影

合気道川越道場

島田五郎

草加合気道研究会

上石唯貴

「県連講習会に参加して」

横田愛明先生の稽古指導はとてもさわやかでした。

主に正面打ちに対する受け方を中心に指導していただきましたが、第一教や四方投げの教示の中には、先生独自の研鑽の成果がにじみ出ていて、私どもに貴重な反省材料を与えて下さいました。

相手と触れ合う瞬間における対応のしかたについては特に力を入れて指導されましたが、試合のない合気道では、その辺の厳しい呼吸を身につけることを忘れてはならないと考えます。

当川越道場からは五人しか参加できませんでしたが、皆さんそれぞれに感銘を受けたようで、道場に帰ってからも反復研究しております。

因みに、私は学生時代の横田先生をよく存じあげておりますが、先生は気力横溢し、早くから将来の利器と期待されておりました。その一方で、心のやさしい方でもありました。この日、ご指導の姿を目の前にして、その強烈な存在感に心を打たれた次第です。

この講習会では、一流の師範の指導が受けられる有難さは言うに及びませんが、ほかの道場の人達と適度の緊張感をもって稽古ができるところにも大きなメリットがあると思います。

ただし、合気道は相手と技術的な強さを競い合う道ではありませんので、初対面の人と稽古する場合には、相手の立場を思いやる気持が大切です。

その意味では、この日は心豊かな稽古相手に恵まれ、さわやかな気分で帰ることができました。

最後に、このような場を設けて下さった主催者のお骨折りに心から感謝申し上げます。

「私と合気道」

私が合気道を始めて一年半となるのですが、日々、自分の生活に合気道が込みこんでいます。手ぶらで外を歩いているときは、一教の動きをなぞったり、傘を持てば剣の手引きをなぞったりとしています。電車の待ち時間では、合気道の手首の体操（小手返し・一教など）をして暇を凌ぎ、そして合気道で一番大事な動きである入身で、人を避ける・物を躲す動作をしたりしています。我ながら呆れてしまうほど、合気道の強い影響を体全体で受けています。考え方の面でも、「許す武道」の影響を強く受けていて、今まで以上に人に対して優しく接するよう、意識するようになりました。

それほどまでに、夢中になっている合気道なのですが、練習時間をなかなか確保できていません。練習時間を土日しか確保できていない上、諸々の事情で練習に参加できないときがあるためです。また時遇に湧き出る怠け心との格闘もあるため、週2回の練習を継続するのは、情けない話ですが、なかなか困難です。合気道の先生、仲間にも恵まれていなければ、到底現在まで継続して合気道を練習することはできなかつたです。「継続は力」。何かを継続していれば大きな力となるという意味と同時に、何かを継続するには大きな力が必要であるという意味を持っているこの言葉を、合気道を通して再認識しています。

まだ初段を取得していない合気道家ですが、自分のテーマはあります。それは、合気道での寝技研究です。私自身は特に寝技の達人ではないのですが、柔道出身であるため、立技・座技がそろっている合気道に、寝技がないのは物足りない印象があるためです。まだ何も研究は進んでいませんが、精進続けて、独自の流派を匂わせる合気道家になりたいと思っています。

志木合気会

清水拓市

「私と合気道」

私が合気道を始めるときっかけとなったのは、父の存在である。父は昔、静岡で合気道を始め、十年間毎日のように稽古をしたという。詳しく話してもらったことはないが、父の師は開祖に直接指導してもらっていた方と聞いている。私が産まれてすぐにその師は入院されてしまったため、父は合気道をやめた。

合気道を学んで気づいたことは日本人の心の深さである。合気道だけではないが、日本の武道武術ではよく「守破離」の姿勢が大事とされている。歴史から学びそれを発展させ新しいものをつくる。この言葉に私は日本人の心を強く感じる。しかし、この心は現代において非常に希薄になってしまっているのではないかと思う。これは日本人が古来より発展させてきた心、「守破離」といった謙虚な心や美意識などを忘れ、物や情報に頼るようになったことが大きな原因ではないかと思う。皆が先の世界を見すぎて、本当に学ぶべき歴史を軽視してしまっているのではないかと思う。

しかし、私は合気道を知ることができた。歴史から多くのことを学ぶことができる。さらに技を深く、心を謙虚にすることでまずは「守」を達成していきたい。



所沢市合気道連盟

山口裕之

「私と合気道」

私は合気道に入門しておよそ10年になります。まだ未熟者ですが、稽古が楽しいです。なぜこれほど夢中になれるのか、今まで考えたことがなかったので、この機会に合気道の稽古の魅力を考えてみました。

「受」と「取」を交互にすることで楽しみが長続きしているようです。受と取、表と裏、右と左。相対するものを交互に行う。難しい。うまくできない。それが稽古を続けていくうちにだんだんできるようになってくる。そこが楽しいですね。昨日より今日、重ねていくことで、少しでもできるようになるのなら、稽古を休むのはもったいないですね。

日々研鑽して身につけたい技の中に「受身」があります。合気道をする私達にとって「受身」といえば、技をかけられた時に自分へのダメージを軽減し、すばやく体勢を立て直して攻撃に転じるための体の動きです。説明は長いが見ると簡単そうです。でも難しい。受身は最初に教えてもらう重要な技です。そして、受身ができるようになってくると、先輩方はとても喜んでくれます。漸く普通に投げてもらえるようになると、自分も認められたと感じられてうれしかったですね。

ところで、世間一般では「受身」というと、受動的態度のことを指します。自分から進んで行動を起こすのではなく、他人にしてもらうことを待つという姿勢となり、よくない態度だと思われています。でも稽古では先生の一挙手一投足をよく見て、自らがその通りに再現しようと努力します。自分勝手に動きを変えないこともあわせ、受身の姿勢と共通します。要は気の持ちようではないでしょうか。姿勢でも、技でも、気持を込めて受身を取り続けながら、今後も稽古に励みたいと思います。